

〈 水 稲 〉

健苗育成は、気象変動に対応するための重要な技術です。今月は、育苗期から田植え後までの各作業の留意点を紹介します。

○育苗期のいもち防除

- ・本田における葉いもちの早期多発は、多くが育苗期に感染し本田に持ち込まれることが原因です。育苗期間の防除をしっかり行い発生を抑えます。
- ・育苗期防除は播種時（覆土前）から播種7日後頃までにベンレート水和剤をかん注するか、ビームゾルを緑化始期にかん注します。嵐プリンス箱粒剤6（10～15g/箱）の場合は、播種時（覆土前）から1葉展開前まで、Dr.オリゼプリンスエース粒剤（25～50g/箱）の場合は、出芽後から1葉期展開前までに散布します。

○代かきと田植え作業

- ・代かきは、少なめの水で行い、稲わらや稲株が田面に露出しないよう、また田面が均平になるように留意します。過度の代かきは稲わら等の分解が進み、土壌還元により根の活力低下の原因となるため注意します。
- ・田植えは、平均気温が稚苗で13℃、中苗で14℃以上の日とし、できるだけ日中の最高気温が20℃以上の温暖な日に実施し活着を促進します。
- ・極端な早植えは出穂が早まり、登熟期間が高温に遭遇しやすくなります。このため、中苗あきたこまちの場合は、田植え日を5月15日以降とします。
- ・安定生産には、初期茎数の確保が重要です。このため中苗の場合は、1株の植え付け本数を3～4本として栽植密度70株/坪以上を目標とします。

○田植え後の水管理

- ・田植え直後は、水深を4cm程度として稲体を保護し保温効果を高めます。活着後は、分げつの発生を促進するため浅水管理とし、ほ場の水温と地温を高めます。

○余り苗の処分

- ・田植え後に連続して3株以上の欠株がある時以外は、収量への影響はほとんどありません。補植用にほ場に残してある余り苗は、いもち病の伝染源になりますので、速やかに埋没するなどして処分します。

○除草剤の適正使用

- ・除草剤は、ラベルをよく読み使用基準を遵守します。使用する除草剤は、前年の残草に合わせて選定します。
- ・除草剤の効果を安定させるため、散布後7日間は止水を行い、かけ流しや落水は行わないようにします。
- ・同一草種が多く残草したほ場は、スルホニルウレア系除草剤（SU剤）に対する抵抗性雑草（イ

ヌホタルイ、コナギ、アゼナ類)の発生が懸念されます。抵抗性雑草対策は初期剤＋中期剤の体系処理か、抵抗性雑草に効果のある成分を含有する一発処理剤による防除を実施します。

○直播(湛水土中直播)

- ・播種期は、平均気温14℃以上となる5月10～15日が適期となります。種子は、催芽初に乾粒重量比1～2倍量のカルパーを粉衣して播きます。この作業はできるだけ播種の前日に行います。
- ・代かきは、少なめの水で行い、ほ場の均平を図ります。また、過度の代かきは避け、移植栽培と同程度とします。落水は、播種前日に行い、地上1mから落下させたゴルフボールがやや露出する程度の硬さにします。
- ・播種後の水管理は、播種後1～2週間程度落水状態にし、その後出芽が揃うまで3～5cmの浅水にします。

〈 小 麦 〉

○減数分裂期追肥と赤かび病防除

- ・県南部では融雪が平年より早かったことから幼穂の発育がやや進んでいますが、沿岸部の生育はほぼ平年並となっています。このため追肥適期は、県南部が平年よりやや早く、沿岸部は平年並と予想されます。
- ・「ネバリゴシ」の減数分裂期は、止葉とその下の葉の葉耳間長が0～+3cmの頃(出穂前15～10日前)が目安となります。この時期の追肥は、収量と品質に効果が高いため生育にあわせて窒素成分で2～4kg/10a程度実施します。ただし、葉色が濃い場合や茎数が極端に多い場合は追肥を控えます。
- ・赤かび病によるカビ毒が発生しないように防除を徹底します。赤かび病感染の危険が最も高い時期は開花期頃(出穂後約7日)です。感染後の薬剤散布は、治療効果があまり期待できないため、予防防除を心がけます。1回目の防除は、シルバキュアフロアブルかストロビーフロアブルを散布し、1回目から7～10日後に2回目の防除を上記以外の薬剤で行います。

〈 大 豆 〉

○排水対策

- ・大豆の安定生産には、出芽苗立ちを安定的に確保して初期生育を確保することが重要です。このため、明きよやモミガラ補助暗きよの施工等による排水対策を徹底します。

○播種

- ・播種は、出芽が安定する5月下旬から6月中旬が適期です。早すぎる播種は避けます。
- ・播種作業は、耕起・整地作業と同時に進めると土壤水分が保持され、除草効果や発芽率の向上が期待できます。砕土率が低いと極端に発芽率が低下しますので注意します。
- ・播種後5日以内に、除草剤を散布します。この際ほ場の前歴や優先雑草を考慮して除草剤の種類を決定します。

〈 野 菜 〉

例年よりも消雪が早まった地域が多く、比較的温暖に経過していることから、作業は前年よりも5～7日程度早まっています。

この時期は寒暖の差が大きく、ハウスで育苗中の品目では、急激な温度変化に注意し、日中は換気を十分に行い適温に管理します。ハウスやほ場の準備は計画的に進め、苗が老化しないよう適期に定植します。

定植遅れが見込まれる場合は、早めにずらし作業を行い徒長を抑えるとともに、育苗後半は極端な水分制限を避けるなど、老化を防ぐ対策をとります。

○育苗ハウスの温度管理

- ・ 今月は露地キュウリや遅植えのトマトの育苗が継続します。水稻の春作業が忙しい時期でもあり、野菜の育苗ハウスの管理がおろそかになりがちです。低温時の温度確保には十分気を配るとともに、日中に気温が上がった際には高温障害を受けないよう、天候に合わせて育苗ハウスの開閉管理を適切に行います。
- ・ 夜間は12～13℃、日中は25℃を目安に温度管理します。風の強い日はハウスを閉めがちになりますが、苗に直接、風があたらないようハウスサイドに寒冷紗や防風用のフェンスを設置するなど工夫をして、温度が上がる時に十分換気できる対策をとります。

○スイカ

- ・ トンネル内の温度確保を十分に行い生育促進を図ります。普通栽培では定植後から活着までの期間は密閉し、その後徐々に穴を開け換気します。換気は定植後20日頃、1株当たりの総葉数が20枚以上確保された頃から行います。
- ・ トンネル内の目標気温は40℃以下とし、子づるの本葉2.5枚期以降は、出荷する3番果の花芽が分化し始めるため、35℃以下とします。

○エダマメ

- ・ 今月は極早生種から中晩生までの播種作業が順次始まります。収穫、調整時に適切な労力配分ができるよう、事前の播種計画を再確認します。品種ごとに播種から収穫までの期間が異なるので、複数品種の同日播種でも、収穫期は重ならず、作業の効率化につながります。JA担当者等に確認して、品種毎の最適な播種日を設定します。
- ・ 収量確保のためには排水対策が最も重要です。明きよや弾丸暗きよ、モミガラ補助暗きよ等の施工により、十分な排水対策を実施した上で作付けします。
- ・ 播種は1穴2粒播きとし、初生葉展開時に1本に間引きます。最初から1粒播きする場合は、欠株対策として補植用の苗を別に準備します。また播種深さは2cmを基準に、土壌が乾燥している場合は3～4cm程度に深くし、覆土後の鎮圧を確実に行います。
- ・ タネバエ対策としてカルホス粉剤を播種時に作条施用し土壌混和するか、クルーザーFS30、クルーザーMAXXの原液を種子に塗沫処理します。タネバエは未熟有機物に誘引されやすいので、堆肥施用に当たっては完熟したものを早めに施用します。また土塊が大きいと被害が増加しやすい傾向があるため、ほ場が十分に乾燥してから耕起し、碎土率を高めます。
- ・ 県オリジナル品種「あきたさやか」、「あきた香り五葉」は中晩生品種です。「あきたさやか」は播種期が5月下旬～6月上旬、収穫期が8月下旬～9月上旬、「あきた香り五葉」は播種期が6

月上中旬、収穫期が9月上中旬となります。早播きをしないように注意します。

○ソラマメ

- ・花芽が見え始めた頃、丈夫な分枝が5本程度確保されたことを確認したらマルチを除去します。
- ・マルチを除去した後に、無効分枝の発生を抑えるため株元に土寄せを行います。
- ・開花後は着莢、莢肥大を良好にするために十分な土壌水分が必要です。乾燥が続くようであれば適宜かん水を行います。通路かん水も可能ですが、畝間に滞水すると根腐れを起こしやすいので十分注意します。

○長期どリアスパラガス

- ・4月下旬に萌芽が始まったほ場では、10～12日程度で収穫作業が始まります。収穫が始まったら、出荷規格の長さになったものから順次収穫します。細茎、弱茎、奇形等の商品価値のない若茎のほか、低温の影響でアントシアン（赤紫色）の着色等あるものは早めに除去し、株の消耗を防ぎます。
- ・夏どりに向け株養成を行うため、春どりの収穫終了時期を見極めて茎を立て始めます。立茎開始時期が早いと5月の収穫量は減少しますが、市場の入荷量が少なくなる6月に収穫が多くなります。また、作付面積が多い場合は、立茎時期をずらすことで労力分散を図ることができます。
- ・春どり終了後に立茎を行う場合でも、M、S規格の細茎の萌芽が増えてきたり、萌芽数が減少するなどの株疲れの兆候が見られるようになったら収穫を打ち切り、立茎、株養成に努めます。収穫打ち切り時期の見極めが難しい場合は、早めに立茎を開始します。
- ・立茎はL規格（1～1.2cm）の太さの茎を中心に、畝の長さ1m当たり10～15本程度を選定し、バランス良く立茎します。立茎が決定した後に萌芽してくるものは、すべて間引き収穫します。

○促成アスパラガス

- ・今月は定植時期となります。遅霜の心配が無くなる頃を目途に、温暖な日を選んで定植します。老化苗は活着しにくいので、ポットの中で根がからむ前に定植します。
- ・栽植様式は畝間140cm、株間35～40cm、畝の高さ20～30cm（10a当たり1,786～1,984株）とし、掘り取り機の幅に合わせて畝間、畝高さを調整します。できるだけ大きな畝を作ることで株が充実し、多収につながります。

〈 果 樹 〉

【気象概況と果樹の初期生育】

果樹試験場におけるりんご（横手市）の発芽期は3月30日で、平年よりも12日早く、日本なし（潟上市）の発芽期は4月1日で、平年よりも10日早くなっています（表1）。

1か月予報（4月30日発表、仙台管区気象台）によると、気温は高く推移する可能性が高く、果樹の生育は早く進むことが予想されます。

表1 果樹の初期生育

(4月20日時点)

樹種(品種)	調査地点	調査年	発芽期	展葉期	開花始	満開期	落花期
りんご(ふじ)	鹿角市	27年	4.6	-	-	-	-
		平年	4.13	4.26	5.14	5.18	5.23
	横手市	27年	3.30	4.11	-	-	-
		平年	4.11	4.21	5.9	5.13	5.19
なし(幸水)	潟上市	27年	4.1	-	-	-	-
		平年	4.11	4.30	5.4	5.9	5.17
おうとう (佐藤錦)	横手市	27年	3.29	-	-	-	-
		平年	4.8	4.30	4.30	5.4	5.17
もも (川中島白桃)	鹿角市	27年	4.4	-	-	-	-
		平年	4.12	5.7	5.6	5.12	5.19

※果樹試験場の調査値(鹿角市は鹿角農業振興普及課調査値)

※平年値は直近10年間の平均値

〇りんご

- ・近年、結実不良や変形果、小玉果の発生が目立ちます。受粉樹が少ない園地や開花期中に天候が不順な時を含めて、果実の高品質化のために積極的な人工受粉を実施しましょう。
- ・摘花は樹体の貯蔵養分の損失軽減や、果実の肥大促進に効果があります。えき芽花など通常着果させない花を中心に摘み取ります。
- ・満開後10日位になってガクが立ち、結実がはっきりしたら、1果そう1果を原則とした粗摘果を行います。粗摘果は開後30日を目標に作業を実施し、早期に園地を一巡することが重要です。

〇なし

- ・結実確保と大玉生産のため、人工受粉を確実にを行います。
- ・受粉後10～15日位になって実止まりがはっきりしたら、1果そう1果を原則とした粗摘果を行い、早めに園地を一巡します。

〇ぶどう

- ・芽かきは、発芽～開花期まで新梢の伸長に応じて2～3回に分けて実施します。残す新梢は、中粒種はやや強めの新梢、大粒種はやや弱めの新梢で揃えるようにし、強すぎる新梢や弱すぎる新梢を整理します。

〇おうとう

- ・結実確保が重要であることから、五分咲きと満開期頃に人工受粉を行います。霜害などで正常花が少ない場合や開花期の天候が悪い場合は、花粉を採取して受粉すると結実率が高まります。

〇樹種共通

- ・開花期前後が最も低温に弱い時期です。「霜注意報」に留意して「燃焼法」等の事前対策を行います。なお、被害を受けた場合は、徹底した人工受粉で結実の確保に努めます。
- ・薬剤散布の際は、農薬の使用基準を守り、薬液飛散に注意して実施します。

〈花き〉

5月はキク類、ユリ類、トルコギキョウ、リンドウ、ケイトウ、アスターなど盆出荷に向けた切り花の定植作業や管理が多くなる時期です。低温や霜等への対策を十分に行い、初期生育の確保に努めます。

また、例年、定植後の強風により、ハウス被覆やマルチが飛ばされる被害が出ていますので注意します。

○露地ギク（盆出荷）

- ・定植は今月上旬が適期で、遅れるほど開花時の草丈が短くなったり、盆過ぎの開花となるため、時期を逃さず定植します。苗を乾燥させないよう、強日光、高温の日は避け、風の穏やかな曇天日に行います。
- ・定植の7～10日後、活着を確認してから、生長点を浅く摘心します。摘心は深すぎると側枝の数が少なく揃いも悪くなり、逆に浅すぎると生長点が残ってしまうので、芽をきっちり折り取りません。
- ・開花調節のためのエスレル処理は、品種や地域の気象条件により異なるので、地域技術を参考に実施します。一般的に2回処理する品種の場合は、1回目を摘心直後に、2回目はその2週間後に行いますが、遅くとも5月25日には処理を終えます。処理量は500倍液で株当たり3cc、a当たり5リットルを目安とします。
- ・エスレルは「幼若性を保持する」薬剤で10日～2週間程度効果が続きます。摘心直後の散布から最終のエスレル散布日まで効果が途切れない散布回数とすることが重要です。
- ・主枝を摘心すると側枝が伸びてきます。品種にもよりますが、側枝長が20～30cmの頃に、生育の揃った側枝を輪ギクでは3本、小ギクでは4～5本を残して整枝します。生育旺盛な側枝でも、他の側枝と揃っていなければ掻き取ります。

○トルコギキョウ（施設）

- ・連作による土壌病害が多くなっています。対処方法として有機物を投入した土づくり、薬剤による土壌消毒、土壌を還元状態にする消毒などがあります。前年の根の障害状況に応じた対策を講じます。
- ・トルコギキョウは地温が15℃以下であったり、水温が7～10℃以下だと生育が抑制されます。低温時には温度確保が大きな管理ポイントとなります。
- ・逆に高温時も早期発蕾等の品質低下を招くことから、ハウス内の換気を徹底し適温に保ちます。
- ・7～8月出荷作型では、定植後1か月間は乾燥に注意し、土壌の水分保持に努めます。土壌水分の急激な変化は青かび根腐病の発生を助長するので注意します。定植後4～6週間になると花芽分化が始まるので、これ以降はかん水間隔を徐々に開け、土の表面が乾いたらかん水します。

○新テッポウユリ（露地）

- ・遅霜のおそれが無くなる、今月上中旬に定植します。定植時の葉齢は、本葉3枚前後が適期です（老化苗は生育不良となり採花率の低下を招きます）。
- ・深植えすると立枯病が発生しやすくなるので、球根部分がわずかに隠れる程度の浅植えとします。
- ・支柱立て、ネット張りは早めに行います。倒伏防止のためネットは2段とします。

- ・乾燥に弱く、特に生育初期の乾燥は早期抽だいを招きやすいため、かん水はほ場の乾き具合を見ながら、草丈が50cm位になるまで続けます。乾燥が続く場合は、畝間かん水等により生育を促します。
- ・早期抽だいたした株は、抽だいたした茎を早期に折り取り、次の抽だいを待ちます。

○リンドウ（露地）

- ・できるだけ早くほ場準備を行います。ほ場の排水やこぶ症の予防のために、必ず明きよを周囲に施工します。
- ・畝立ての前に設置本数、畝の長さを再確認して、苗の過不足がないよう気を付けます。
- ・定植は、片手で土に穴を開け、もう一方の手で葉をつまんで地表面より若干（約5mm）深く植えます。根鉢の土はなるべく落とさないように注意します。
- ・苗と土との間に隙間を作らないよう周りから土をかけ、更にマルチ穴の上に土を盛って、マルチ内からの熱風害と乾燥を防止します。
- ・リンドウは乾燥に弱いので、定植と同時に、遅くても定植後1時間以内にかん水をします。また、定植後1か月間は極端に乾燥することがないように、特に根が活着するまでは注意します。
- ・2年目以降の株は、草丈が30cmに達するまでに萌芽した芽の整理を行います。仕立て本数は8本を基準とし、株の外側の生育が揃ったモノを残すと株持ちが維持できます。樹勢の弱い株は間引く本数を多くします。

○ダリア

- ・今月から露地栽培を中心に、定植適期となります。
- ・近年は5～6月に暑い日が続く場合がありますので、なるべく涼しい今月上旬には定植し、夏までに丈夫な株を作ります。
- ・球根定植の場合、球根は発芽点がクラウンの中心にあるものを選びます。
- ・球根の尻が切れていると生育が遅れる場合がありますが、切り花には影響しません。
- ・発芽点が上向きになるように、芽を揃え、深さ5～10cmで植えます。
- ・挿芽苗利用の場合は、定植前にポリポットに十分かん水しておきます。
- ・暑い日の日中や風が強い日は、苗が痛みやすいので、定植を避けます。
- ・定植後は、根鉢と床土の隙間を埋めるように、十分なかん水をします。
- ・芽が伸びてきたら2～3節残して摘心し、4～6本の側枝を伸ばし、さらに伸びてきた側枝を1～2節残してもう一度摘心する「ダブルピンチ」を基本とします。

○その他切り花の一般管理

- ・ケイトウ：ハウスに直播きされたケイトウは、播種2週後にフラワーネット1マス当たり3本仕立てになるように、生育の良すぎるものや悪すぎるものを間引きます。
- ・アスター：今月が定植期となります。連作では立枯病が発生するため、同じほ場には植え付けせず、最低でも4年は間隔を開けます。日当たりと排水の良いほ場を選びます。

〈 畜 産 〉

○牧草

- ・一番草の適期収穫が、年間の収穫量に大きく影響します。刈取適期は栄養収量が最大になる時期で、イネ科牧草は出穂期、マメ科牧草は開花始期となります。雪解けが遅い地域でも、気温の上昇に伴い生育は一気に進みますので、早めの準備を心がけます。
- ・収穫作業は天候に左右されます。草地面積が多い場合にはイネ科牧草の穂ばらみ期から刈り取りを開始することやラッピングサイレージの調製を組み入れるなどして計画的に作業を行い、刈り遅れのないようにします。
- ・刈り取りの高さが低すぎると干ばつの影響を受けやすくなりますので、再生力を維持するため刈取高を10cm程度とします。また、収穫の1週間後位に2番草の収量確保を図るため追肥を行います。

○飼料用とうもろこし

- ・播種は日平均気温が10℃を上回る頃を目安とします。日照時間が長い季節の生育期間が長いほど栄養収量が多くなるので、播種時期が遅くならないようにします。
- ・播種の精度や除草剤の効果を高めるため、砕土と整地を丁寧に行います。植栽本数は、10a当たり早生種で8,000本(75cm×17cm)前後、中生種は7,000本(75cm×19cm)前後になるように、条間や株間を調節します。
- ・晩霜に備えるため覆土の厚さは3cm程度を確保します。また、播種後に低温が続くと発芽率が低下するので、天気予報を参考に作業を進めます。
- ・吸肥力が強いので養分欠乏が起こらないように十分に施肥する必要がありますが、家畜糞尿の過度な施用は硝酸態窒素の上昇を招きますので、施用量の目安は5t/10aです。
- ・除草剤は、同じものを長く使用していると特定の雑草が多くなる場合があるので、雑草に合わせた選択が必要です。土壌処理剤の場合は、ほ場の表面が湿っている時に散布すると効果が高いため、晴天が続く時は朝露のある早朝散布や、希釈水量を多めにして散布します。

(お問い合わせ先)

秋田県農林水産部園芸振興課

TEL : 018-860-1801 FAX : 018-860-3822

E-mail : engei@pref.akita.lg.jp